

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

RCC主催講演会 「大学のカルト対策」

「信教の自由を守るために」

講師 櫻井 義秀氏

報告者 RCC 研究員 舟木 謙

二〇一四年一月一日
(月) 講師に櫻井義秀先生(北海道大学大学院教授)をお迎えして標記の主題で講演会を開催いたしました。今回櫻井先生をお招きした背景には、私たちが日ごろの大学で接する学生が直面している以下のような事情があります。

二〇一五年三月にオウム真理教によって引き起こされた東京地下鉄サリン事件から二〇年を迎えますが、あの事件を契機に明らかになったオウム真理教の実態によって、「宗教」一般に対する警戒心が生み出されるとともに「カルト」という新しいカテゴリーが認知され、得体のしれない不安と共にその存在に対する恐怖が社会には蔓延することとなりました。

一方「信教の自由」という

言葉が錦の御旗となり、本学においても毎年学生生活に支障をきたす団体に少なからぬ学生が勧誘されているという実態が存在します。「宗教」と危険な「カルト」集団の線引きが難しいように思われる中で、大学という組織がいかにしてそこに通う学生の生活・安全を守ることができているのか、という喫緊の課題が大学に勤めるものの前には常に横たわっております。

この一見非日常的に見えて実際は日常的な問題をどのように解釈し、対応するべきかに関してはいわゆる「信教の自由」というものが無条件に肯定されるのではなく「個人の宗教選択の自由を侵害するようない」「信教の自由」は認められないというはつきりとした視点を示していただきました。また大学という「自

近著である『カルト問題と公共性』において、大学という「公共の場における「宗教」「カルト」のあり方が極めて明確に示されており、私たちの今後のあり方に大きな指針を与えてくださること考えた結果、このたびの講演会の開催に至りました。

講演は、まず私たちが曖昧に使用する「カルト」という言葉・概念に関する正確な定義づけから始まりました。先述したオウム真理教などを例に「マインドコントロール」の実態やその仕組み、また「宗教」や「信仰」の名を借りてなされてきた極めて反社会的な行為の実態に関する説明と共に、「宗教」と「カルト」の相違に関して具体的な例を交えて明快な示唆を与えていただくことができました。

そして、いわゆる「信教の自由」というものが無条件に肯定されるのではなく「個人の宗教選択の自由を侵害するようない」「信教の自由」は認められないというはつきりとした視点を示していただきました。また大学という「自

由にものを考え」たり「いろいろな考え方を自由に討議」したりする「公共的な空間」において独断的な教えを強制したり、自由にあるいは主体的に考えることを禁じ、大学が本来保障すべき自由を侵害する団体に対しては毅然とした対応をすることが必要でありました。

大学も含めてグローバル化する世界の中で改めて宗教に対するリテラシーを学ぶ必要性と「公共性」というキーワードによって大学が堅持すべき「自由」に対する責任を再確認する機会を与えていただいた櫻井先生に改めて感謝を申し上げます。報告とさせていただきます。



RCC主催講演会

講師 岡田 温司氏

「黙示録―氾濫するイメージたち」

報告者 RCC主任研究員 東 よしみ



二〇一四年一二月九日（火）、図書館ホールにおいて、京都大学大学院教授、岡田温司氏が『黙示録―氾濫するイメージたち』と題して講演をしてくださいました。近著、『黙示録―イメージの源泉』（岩波新書、二〇一四年）に基づき、様々な画像や映像を

見せながら、黙示録のもつ両義性について語られました。

「西欧の脅迫観念」を形成したとも言われるヨハネの黙示録は、あらゆる経験の根底にある（デリダ）と言われるほど、西欧の文化や芸術に影響を及ぼしてきました。しかしながら、早くはエウセビオスが黙示録を偽書としたように、黙示録は立場によって見方が逆転する可能性がある危うい存在でした。黙示録は一方で、救済、希望、勇気を語りながら、それが同時に不寛容、暴力を扇動するものになる。黙示録が示すのは、警告が威嚇に、激励が扇動に容易に変わりうるという二面性、両義性です。

黙示録の両義性を示す例として、まず、太陽を身にまとう女性とバビロンの大淫婦が

あげられます。黙示録のイメージは、男中心で展開し、女性たちの数は少ないですが、その数少ない女性たちのうち、太陽を身にまとう女性がポジティブなイメージを象徴するのに対して、バビロンの大淫婦は、ネガティブを象徴します。その後の解釈史では、太陽を身にまとう女性が、マリアの無原罪を描く際に使われるのに対して、バビロンの大淫婦は悪徳を象徴する存在として描かれます。後に教皇が、バビロンの大淫婦として描かれますが、どちらのイメージが使われるかには、各時代の事情が反映されます。ラングの映画「メトロポリス」では、アンドロイドのマリアがバビロンの大淫婦として踊ります。

また、黙示録の両義性を示す他の例として、キリストに相対する存在、アンチキリストが挙げられます。アンチキリストは黙示録の中ではサタンや偽預言者として登場します。一〇世紀には、アゾによりアンチキリストの伝記が書

かれています。アンチキリストの誕生とイエスの誕生は、悪魔による出産に対する聖霊による出産と、しばしば対照的に描かれます。このアンチキリストも、「イメージの戦争」の中で頻繁に使われてきました。カトリック側がルターを七つの頭をもつ者として描いたのに対して、プロテスタント側は、カトリック教会をアンチキリストとして描きました。敵方を断罪するために、敵がアンチキリストと同等されるのです。また、フランシス・コッポラの映画「地獄の黙示録」では、キリストを象徴するウィラードがアンチキリストを象徴するカーツに惹かれていきます。ついにウィラードはカーツを殺しますが、興味深いことに、一体どちらがキリスト（犠牲の子羊）でどちらがアンチキリストなのか、分からなくな

ります。アンチキリストとキリストとの間でゆらぎが生じるのです。このようなゆらぎを考える際に示唆的なのが、教父オリゲネスの「人間本性は、根底まで乱されずに、この戦い（キリストとアンチキリストとの間の戦い）を切り抜けることができない」という言葉です。

講演には一般の方も多く参加され、図書館ホールは一杯となりました。



■ 研究プロジェクト報告

「現代文化とキリスト教」

RCC センター長 水野 隆一

研究プロジェクト《現代文化とキリスト教》は、ニューズレター二五号で報告した後、次のような研究会を開きました。

△第五回研究会

二〇一四年七月一七日(木)

発題者：岡山 保男氏(キリスト教と文化研究センター教授)
テーマ：「ホロコースト文学とミュージカル」

シヨールム・アレイヘム『牛乳屋テヴィエ』に見られる、



第6回研究会発表者、岡本亮輔氏

ディアスポラのユダヤ人たちの文化と思想について見た後、『牛乳屋テヴィエ』に基づくミュージカル《屋根の上のバイオリン弾き》で演奏されるクレズマー音楽を聴き、独自の文化についての分析が示されました。

△第六回研究会

二〇一四年一〇月一七日(木)

発題者：岡本 亮輔氏(立教大学兼任講師、成蹊大学非常勤講師、東京大学死生学・応用倫理センター研究員)

テーマ：現代社会における祈りの場所／弱さがもたらすつながりの体験

現代最も有名な巡礼地であるサンチャゴ・デ・コンポステラの歴史や、巡礼路の様子、巡礼者の体験の分析を通して、信仰心や共同体への帰属意識が「弱い」からこそ、巡礼地・路において「つながり」

が可能となっていることが示されました。

△第七回研究会

二〇一四年一月二〇日(木)

発題者：白波瀬 達也氏(社会学部助教)

テーマ：カトリック教会における多文化共生の展開

「多文化共生」と宗教が交錯する具体例として、在日外国人の信者数が多い浜松市のカトリック教会の事例をとりあげ、その背景や現状を議論した上で、カトリック教会における多文化共生の実態、課題が指摘されました。

△第八回研究会

二〇一五年一月一五日(木)

発題者：舟木 讓氏(経済学部教授・宗教主事)

テーマ：キリスト教の日本における土着化をめぐるテーマ・パークにみるキリスト教的メッセージ

「キリスト教は日本社会に受け入れられているのか」との問いの下、テーマ・パークにおけるパレードやステージ

を、実際の映像を見ながら分析しました。そして、そこには、「愛」や「絆」といった、キリスト教的価値観に基づくと考えうるものが見いだされることが明らかにされました。

なお、プロジェクト研究員、三阪夕芽子氏(社会学研究科博士課程後期課程学生) 発題による第九回研究会を、三月五日(木)に予定しています。

を、実際の映像を見ながら分析しました。そして、そこには、「愛」や「絆」といった、キリスト教的価値観に基づくと考えうるものが見いだされることが明らかにされました。

テーマは、「現代アフリカ社会における教会の『モダンさ』と文化受容」です。

様々な視点から現代文化とキリスト教の関係を探ってきた研究プロジェクトですが、第九回の研究会をもって、一応の終了となります。来年度は、これらの発表を基に、研究成果を出版したいと考えています。

■ 研究プロジェクト報告

「東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・市民社会の役割」

RCC 副長 山本 俊正

本プロジェクトは二〇一三年度から開始され、二年目を迎えている。二〇一四年度秋学期は、国家間の対立に翻弄されがちな、中国、韓国の留学生を交え、在日、日本人学生を含め、「東アジアの和解と共生」に関して、以下のよう、カフェ・ワークショップ形式の研究会を二回開催した。

秋学期第一回研究会(東アジア学生交流カフェ)

日時：一一月二〇日(木)、一七時～一九時

場所：関学会館 翼の間
テーマ：「関学で日本人学生と留学生のコラボは進んでいるのか?もっとコラボするにはどうしたらよいか?何が必要か?」

フアシリテーター…

森本 郁代(本学法学部教授)
榎本てる子(RCC主任研究員)

研究会(交流カフェ)では、

上記のテーマに従い、四つの小グループに分かれ、お茶を飲みながら、アイスブレーキング、KJ法によるグループ討議と発表、全体での分かち合いがなされた。参加者からは、「関学の留学生と交流する機会や場が初めてだったので、知らないことがわかってよかった」(神学部学生)、「私のテーブルには私を含めて日本人が三名、韓国人が三名いた。韓国の文化や情勢について多くを教えていただいた」(経済学部学生)「学部の留学生がその国の言葉を教えるアルバイトが学内でできると良いと思った」(中国人留学生)「日本人の側からしたら留学生とのコラボが進んでいると思って

いたが、留学生の側から見ると、進んでいない現実がわかった」(神学部学生)などの感想が寄せられた。参加者は、日本人学生二〇名、留学生一五名、教職員五名の合計四〇名。

秋学期第二回研究会

(和解と共生のワークショップ)

日時…二月二日(金)、

一七時～一九時

場所…関学会館 翼の間

テーマ…「和解と共生のワークショップ」
「共に生きる世界の居場所としての関学をめざして」

フアシリテーター…

梁陽日(立命館大学生存学研究センター/RCC研究員)

研究会(ワークショップ)

では、日本・アジアをはじめ世界の中の私たちの置かれて

状況を考えることから

ら出発した。「神の

似姿」として創造さ

れた人間が本当にそれ

の尊厳を大切にされ

ているのか。また、

私たちは政治、経済、

歴史の中で、格差や

差別、排除の中に置

かれてい

るのではな

いか。「ジャンケン・

オリンピック」の

ゲームを通して、「勝

ち組」、「負け組」による、抑圧的構造を

疑似体験した。また、東アジア

で最も必要とされている相互

の信頼関係の醸成を「トラ

スト・フォール」(ペアになり、

一人が後ろに倒れ、もう一人

がそれを支える)の体験によっ

て、身体性をもって知ることが

できた。また、自分を大切に

にすること、他者への依存

の問題、「いじめ」に関する経

験など、意見交換が行われた。

留学生のクリスマスイベント

と日時が重なり参加者は八名

であった。

研究プロジェクト報告

「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」

RCC副長 山本 俊正

秋学期も、「建学の精神考

第四集」の編集作業を進め

た。春学期は、「チャペル週

報」をはじめとして、学院を

構成する各学校、研究機関に

よって発行された、「建学の

精神」に関連する資料を収集

し、時系列に分類する作業を

行った。秋学期は、収集され

た資料を研究プロジェクト委

員で分担し、読み合わせを行

い、最終的に掲載する原稿を

絞り込み、三二本の原稿を掲

載することとした。昨年一

月の段階で印刷所に初校を提

出し、第二校の校正作業を進

めている。また、巻末には聖

書の索引、資料編も付記する

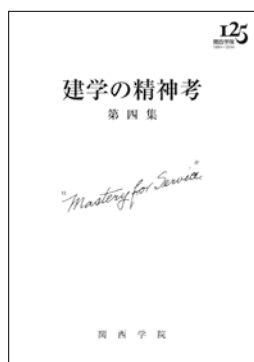
準備を進めている。

編集後記



今年度後半の本センターの活動は、全体として、いつも

『建学の精神考』はキリスト教主義教育研究室により一九九三年三月に、第一集が発行され、第二集は一九九五年一〇月に、第三集は、一九九八年一月に発行されている。第四集は、関西学院創立一二五周年にあたる今年度、一二五周年記念事業を兼ね、キリスト教と文化研究センター(RCC)の編集によって発行される予定である。



以上に多くの方々との協力や参加があり、毎回新鮮で活気あるものになりました。今後の発信にご期待ください。(M)

